

地べたからの 想い

恒志会会報
NPO法人恒志会

平成26年度 Vol.9



クリンソウ群落

“1たす1が2じゃない世界”

恒志会常務理事 藤巻 五朗

オバマ大統領も訪れた日本科学未来館で“1たす1が2じゃない世界”の展示が2014年2月～9月までであり、NHK TV視点・論点でも取り上げられた。そこでは、日常の身の回りには $1+1=2$ ではなく、 $1+1\neq 2$ の世界が多いことや、自然は $1+1\neq 2$ の世界であることを楽しく学べるようになっていた。

以下は私の意見であるが、もともと $1+1=2$ という数式はヒトが人間の社会利便性のために作り上げた規則である。便利に、都合よく、快適な生活にと便宜的に作り上げた産物であり、文化である。

その文化の中でも最も基本で、単純な規則なので、自然界での原則であるかのように錯覚して、現代人であれば誰でも、全く疑う余地なく $1+1=2$ は正しいと答えるし、科学性の礎にもしている。

それは誰でも生れてすぐに、両親からすり込まれ、保育園から大学への教育各段階の度に強化され、規律化して、正義になる。故に、その文化生活では $1+1=2$ なのは当然だし、その頭でなければ、人間としておちこぼれて、今ここにはいない。

自然界ではあり得ない $1+1=2$ であり、真理の世界では、初めの1と後の1は同じではない。これを同じものとしたのは、人間特有の便宜性である。

加えて2と決めた規則は、ヒトが個として生きるよりは、複数が周囲との人間社会を形成して、そこでの人間関係を円滑にするために、自然と自己を無視して、人間が便宜的に十把ひとからげにして、勝手に規則化したもので、文化とした。

その文化を受け入れて生きるほうが便利であり、快適であるが、その世界では人間は病むことができる。ヒトは人間が作り上げた便宜的な社会の中で病む。それは元の心身(ヒト)は真理の自然界で生まれたのに、人間社会を生きていくために、人間が作り上げた便宜的な社会を受け入れて、文化生活をする。その自然と人間便宜性とのギャップが、そのひずみこそがヒトを病める人間にさせるのである。

W.A.プライスは地球レベルで調査して、その著書“食生活と身体の変退”の中で“先住民は白人文化が入り込むことで病む”ことを真実と伝えている。

好んで病むヒトはいないが、無自覚に・無意識的

に病人になっていく。病識がないのも当然である。

そして病態が自己管理能を超えたとき、他者に身をゆだね、治療を受ける患者になる。ヒトは文化の中で病人になり、次いで患者になるのである。

そして病んだ人間は必ず治りたがる。それも人間便宜的社会の中で治って、さらに、なお利便生活を謳歌できるように求める。この $1+1=2$ の上に成立する歯科医学での診療は対症療法でしかないし、それを超えることはできない。それは修理作業をしているに過ぎない。 $1+1=2$ では治癒しないが、 $1+1\neq 2$ の世界であれば自然治癒すらも起こり得る。

例を挙げる。中村天風は1906年結核を発病し、日本・米国・欧州にて医療を受け、医学を修めても治せなかった重度の肺結核を、ヒマラヤ山中でヨガの聖人カリアップ師の指導のもと、文化人であることが心身の病気の治癒を妨げていることを論されて、文化人から脱皮し、天の声を聴くほどに自然に溶け込み、自然と自己が融和した結果、医学では不可能であった結核を自然治癒に導き、完治させて、2年7ヶ月後の1913年帰国した話は有名である。

真理を生きているのであり、デカルトのいう“人類は病むことを通してこそ道理を学ぶ”のだ。

今年のフォーラムの特集は『口と脳』である。

文化をどう使いこなすかの問題であるが、口腔管理のブラッシングは即時に脳に影響を与え、また、重力に沿っている噛み合わせも歯根膜反射での判断で、即時に脳に影響を与える。歯肉マッサージブラッシングと生理的下顎位での噛み合わせは副交感神経系を優位脳にして、心身を健全化する。しかし、歯磨きと、ミクロン単位変位した非生理的下顎位での噛み合わせでは交感神経系を優位脳にして、種々の病気を発症させるようになる。

自然と自己が融和する正しい脳内生理は副交感神経系優位脳であり、ストレスすら自己制御できる。

最も恐ろしいことは、人間が作り上げた便宜的な社会での不正な文化人脳は、自らがヒトを絶滅危惧種に追い詰めていることすら気づかないで、快楽を迫及していることである。これは歯科が参加することで改善可能である。みんなでガンバロー!!!

口腔管理のためのブラッシングはどのようにすれば効果的か —パストラル歯科における Physiotherapy の研究—

藤巻 五朗

D. D. S., Ph. D., ORT-DDS (3Dan), パストラル歯科, 東京
NPO法人恒志会常務理事

【はじめに】

この小誌を手にとられる皆様は片山恒夫先生に何らかの形で関わりのある方であると思う。時の経つのは早いもので、15年間続いた片山セミナーが終了して、すでに18年も経たので、今の若い歯科医はご存知ないかもしれない。

30年前、片山先生といえば朝日新聞に連載で取り上げられた大阪の開業歯科医師で、“手術をせず、ブラシー本で重度の歯周病をなおす歯周病治療の大家”、と誰にも知られた名医です。

この表現は片山先生の側面を言い表しているが、大なる誤解でもある。

それは片山先生がブラッシングの質問を受けた後で、一人ごとのように、そーと“ブラシだけでなおるもんか”と小さくつぶやいていたのを、私は何回か耳にしていたのです。

しかし、片山先生の歯周病治療の柱の一つが Oral Physiotherapy であり、その中でも重要な要素としてブラッシングがあるのも事実です。そして、そのつぶやきは Physiotherapy¹⁾にはブラシだけではなく、他にもいろいろと要素があるということの意味しているのです。そこで私なりに解釈して、片山先生のように歯周病治療を成功に導く Physiotherapy としての臨床を記述してみようと思う。

【Physiotherapyを心身生理回復療法と訳す】

Physiotherapyは医学辞典では物理療法・理学療法とでてくるが、意味が伝わらない。片山先生は自然良能賦活療法²⁾と訳されていた。奥深さを感じ、良い訳だとは思いますが、一般的にはなじみのない言葉であり、私にとっては“じねんりょうのう”と読むことでどうにか判ろうとするのだが、

どうにも難しく、患者に説明しきれないでいた。そこで私は Physiotherapy を心身生理回復療法と訳し、そのように捉えることにしている。なぜ、そのような訳にしたのかは文末までには判っていただけだと思う。

【病むヒト VS 患者】

治療役割分担として患者自身が受け持つ治療の一つとしてのブラッシングをして頂くとき、診査してからその都度、ブラシの選択とその手法を処方することが必要になるのだが、治療現場でそんなデリケートな診査をしている術者がどれ程いるのだろうか。

それは、治療対象者を“治療を受けるヒト=患者”として受け止めているので、術者は状況から治療方針を導き出して、処置することになってしまっていて、診査・診断をする前に、すでに“患者=治療を受けるヒト”として対面して、処置(処方)をしてしまっているように思える。

そうではなく、対象者を患者としてではなく、“病気になったヒト=病人”として受け止め、どこがどのように病んでいるヒトなのだろうか、自己管理でききれてないヒトとして接し、刻々変化する病変部の病態をどう的確に把握して、どう対応していくのかと受け止めて診査し、探索しなければならぬ。ブラシの選択とその手法を処方するのはその後になる。その探索方法として、私は握力変化を応用して判断している。その手法は一般的な医学ではないため、変わった・間違った方法であると思われるだろうから、その判断手技を解説しておく。

【BDORTについて】

1970年代にニューヨーク在住の医師 大村恵昭

教授は身体・臓器に異常があると握力が変化することを発見して、指を合わせて作ったO-リングの握力変化を利用して、生体情報を感知する検査手技を完成されて、Bi-Digital O-Ring test (Omura, Y. 1977-2014; 以下BDORT)^{3,4)}と名付けた。

その原理は“生体そのものは極めて敏感なセンサーであり、その生体の存在を否定する状況では筋力は低下する。逆に存在を肯定し、ハッピーに、健康にさせる状況・条件では筋力は強くなる”ということに基づいている。その現象の発見以来、この検査手技は世界各地の医療機関で研究が進められ、1993年にはアメリカでの生物学的特許が認可された。

このBDORTを応用することで①異常部診断法

②薬剤・物質・金属適合性試験 ③同一物質間の共鳴現象を応用しての遺伝子・細胞内伝達物質・細菌・ウイルス・ニューロトランスミッター・ホルモン・金属 (Hg・Al・Pbなど)・薬物などの定性・定量検査や局在分布を確定でき、それらを使いこなすことで病気の原因を推測できる。④歯科的には歯科材料や金属の適合性試験・病原部の探索・適正な生理的下顎位の再現 などができる。⑤対象者の体調具合や免疫力の程度を読み取り推測することができる。

しかし、このBDORTはあくまでも医学的には補助診断法であり、補助的検査法であることを理解して使いこなす必要がある。

この小論文でのブラッシングに関する研究データはBDORTの同一物質間の共鳴現象を応用することで定量測定をして出したものである。

【BDORTの海外での受け止め方】

2013年2月・12月に、初代スロバニア大統領であり、現EU議会の副議長であるAlojz Peterle氏が緊急来日された。氏はEUの環境・公衆衛生・食の安全のための委員会の委員長であり、EU対ガン議員連盟委員長も兼任されている方である。

氏が申すには、ヨーロッパを含め、世界の医療経済は崩壊状態にあり、先端医療は国民のほとんどは受けられず、現医療システムも継続不可能であり、もはや国民のための医療にはならない。健康のためにはより良いものは何でも導入したいのだが、抵抗勢力が強く、破たんした医療経済を立

て直すことが難しい。

一方、セルビアでは医学アカデミーが長年かけて全世界の医療システムを調査した結果、国民のためになるのはBDORTが最も良いシステムであることが判った。そして2012年5月には、セルビア政府により医学の専門分野として正式に認められ、特定の教育プログラムを150時間以上受講し、試験に合格した医師、歯科医師にはセルビアの厚生省からライセンスが与えられるようになった。

そして、ヨーロッパ連合国では2014年から経済性にも優れ、健康に良いものは何でも取り入れられる統合医療会議を設立するので、BDORT医学会にはスタート時よりこのセルビアのベオグラードでの会議に是非とも参加して、抵抗勢力を納得させるような会議にしてほしいとのことでした。その会議とは、

7th European Congress for Integrative Medicine
“The Future of Comprehensive Patient Care”
Joined with
12th Biennial International Symposium on the
Bi-Digital O-Ring Test
30th Annual International Symposium on
Acupuncture, Electro-Therapeutics and Latest
Advancements in Integrated Medicine
1st Serbian Congress for Integrative Medicine
10 ~ 11 October 2014 Crown Plaza Hotel,
Belgrade, Serbia,

という4つの会議が連合する合同会議です。

そこで、私も2013年のニューヨークのコロンビア大学で開催された29th Annual International Symposiumでの研究発表に引き続き、今回はPhysiotherapyの一つである噛むことの心身への影響について研究し、発表の準備をしている。

【2013年のコロンビア大学でのBDORT学会】

ここで昨年のコロンビア大学での29th Annual International Symposium on Acupuncture, Electro-Therapeutics and Latest Advancements in Integrated Medicineで発表したものを再録記載する。

それはOral Physiotherapyの一つである長時間歯肉擦過刺激としてのブラッシングが心身各部にどのような変化を引き起こすのか、そして、何分間の連続歯肉擦過刺激が効果的なのかをテーマに

研究したものであった。このテーマは片山先生にご縁があり、歯周治療に関心がある方であれば興味を持つだろうし、必ず役に立つと思う。

【2013年の学会日本語版を記載】

歯科的日常生活行動の身体への影響

その4 Oral physiotherapyによる

心身各部の変化⁵⁾

【はじめに】

口腔内のブラッシングは、一般的に歯面についた食物残渣やプラークを除去する目的で行われる。その「歯面」のみを磨くブラッシングは交感神経を優位にさせるので、心身の健全化には好ましくない。しかし、歯肉や歯槽粘膜への擦過刺激を主としたブラッシング-Oral Physiotherapyの一つである長時間歯肉擦過刺激(以下マッサージ・ブラッシング) - を励行すると副交感神経を優位にできるので、口腔内だけでなく、心身の各部にわたる改善・健全化には適切であることはすでに報告した^{6,7)}。

【目的】

マッサージ・ブラッシングを行うにあたって、どれくらいの時間をかけて歯肉の擦過刺激を励行するのが心身への変化にとって最も効果的であるのかをBDORTを応用して検証する。

【方法】

1. ORT生命科学研究所製作の定量濃度試料(RCS)のアセチルコリン (Ach)、ノルアドレナリン (NE)、ThromboxaneB 2 (TbxB 2) やセロトニン、テロメアなどを被験者の前頭部・海馬などの頭部、胸腺などの臓器、症状発現部位、不定愁訴部位をBDORTにより定量測定する。

2. 被験者はProspec soft brush (GC社製) を使って、歯頸部歯肉・歯間乳頭部・歯槽部歯肉、口蓋舌側歯肉粘膜をマッサージ・ブラッシングする。

3. ブラッシング時間は一回につき、1分間、3、5、10、12、15、20、30分間として、各分単位ブラッシングを行い、その後1と同部位を同様に定量測定し、前後を比較する。

測定値はBDORT Unitであり、それを比較した
4. 被験者の各ブラッシング測定後、15分間マッサージ・ブラッシングのみマッサージ・ブラッシングの指導を兼ねて専門家(演者)によるブラッシングを行い測定した。

【結果】

マッサージ・ブラッシング後はAch・Serotonin・Telomereの3種はほぼ同率の増加傾向を示し、NE・TbxB 2の2種はほぼ同率の減少傾向を示した。測定比較値の増減率を以下の表に示す。

【考察】

1～30分間までの各単位時間マッサージ・ブラッシングを行った後での計測では、自律神経系の副交感神経作動薬であり循環系を改善させるAch、脳内物質で平常心を制御するSerotonin^{8,9)}、正常細胞の生命力の強さや健康状態の指標となるTelomere⁴⁾の3種はほぼ同率の増加傾向を示し、自律神経系の交感神経作動薬で不安や消極的にさせるNE^{8,9)}、循環系阻害物質であるTbxB 2の2種はほぼ同率の減少傾向を示した。

その増減率は表に示したが、1分間では約10%のわずかな増減、3・5分間では約10%～25%の増減、10・12分間では約20%～30%の増減であったが、15分間では約2～3倍に増加と1/2

ブラッシング(分)	Ach Serotonin Telomere	NE TbxB2
1分間	1.1 倍増 (約10%増)	1/1.1 減 (約10%減)
3分間	1.1～1.2 倍増 (18%増)	1/1.1～1/1.3 減
5分間	1.2～1.3 倍増	1/1.1～1/1.2 減
10分間	1.2～1.6 倍増	1/1.3～1/1.6 減
12分間	1.2～1.5 倍増	1/1.6 減
15分間	2～3 倍増 (専門的;3～10 倍増)	1/2～1/3 減 (専門的;1/3～1/10 減)
20分間	2～3 倍増	1/2～1/3 減
30分間	2～3 倍増	1/2～1/3 減

～1/3の減少という大きな増減率を示した。

しかし、20分間と30分間の連続マッサージ・ブラッシングでは15分間のときと同じ増減率であった。それはある時間以上の連続的にブラッシングをしてもファンタムエフェクト³⁾が作用して、効果は相殺されるものと推察される。

これらのことから長時間連続マッサージ・ブラッシングを行って、心身各部を的確に変化させ、改善し健全化させるためには15分間のマッサージ・ブラッシングを行うことが最も効果的であることが示唆された。

そして、被験者によるブラッシングのやり方は、模型上でブラシの持ち方と毛先の当て方、そのゆさぶり方を口頭で説明してから行ったのであるが、観察していると、どうしても歯頸部歯肉や歯槽部歯肉の表面的なブラッシングしかなされてなかったもので、測定後、マッサージ・ブラッシングの指導を兼ねて専門家（演者）が直接15分間マッサージ・ブラッシングを行い測定した。

その要点はブラシをペン・グリップで把持し、手首の動きで歯頸部歯肉や歯槽部歯肉をなでるようにゆすりブラシをすること。歯間乳頭部歯肉への差し込み振動ブラシと、口蓋舌側歯肉へのフォonz法ブラシを丁寧に行うことである。その方法を確実に行うことで、被験者によるブラッシングより数倍の高い効果が認められた。

また、歯周病や心身の治療としての長時間歯肉擦過刺激ブラッシングを行う時間が30分～1時間と長い時間獲得できるならば、15分間ごとに区切って行い、ファンタムエフェクトが消失する3～5分後に、再度のブラッシングを行うようにすれば、心身各部への改善・健全化効果は倍増する。

【結語】

Oral Physiotherapyの一つである長時間歯肉擦過刺激ブラッシングは15分間ごとの連続ブラッシングが最も効果的である。そのとき歯間乳頭部歯肉への差し込み振動ブラッシングと、口蓋・舌側歯肉へのフォonz法ブラッシングを確実に行うことで数倍の高い効果が認められた。以上

この発表はブラッシングの連続時間についての研究であったが、ブラッシングするそのことが心にも、脳内にも、身体的にも、体のすみずみまで

に多大な影響を与えることと、ブラッシング時の毛先のあたる場所による生体内物質の変動の再確認と、その検証も目的であった。

この発表を行ったときは、その冒頭で歯周病患者の自己管理としてのブラッシング効果を実感していただきたく、進行した歯周病の治療例の15年・20年・30年経過症例を供覧した後に、研究の発表をした。

発表後のQ&Aでは具体的なブラッシングの方法やブラシの選択などに多数の質問があり、かなり盛り上がっただけでなく、直後ペンシルベニア大学教授、ニューヨーク大学教授など数名が駆け寄ってきて、とても良い発表であったとの感想とねぎらいを頂いた。そして、トルコのイスタンブール大学教授の医師は友人歯科医に見せたいからと発表のパワーポイントのコピーをせがまれたりして、気分良く帰国することができた。

【過去におけるパストラル歯科での口腔管理のためのブラッシング研究】

そのⅠ：私は2002年の第5回BDORT国際シンポジウムにおいて“歯科的日常生活行動の身体への影響 その2 歯ブラシによるOral Physiotherapyの身体への影響”との演題で発表した⁶⁾。それは、ブランクコントロールとしてのブラッシングではなく、治療としてのOral Physiotherapy = 長時間歯肉擦過刺激ブラッシングを確実に実行した患者さんは歯周病が改善するだけではなく、何故か全身的にも顕著な改善をみることが多い。その理由を探究する目的でBDORTを応用して調べてみた。

それは有歯顎者・無歯顎者共に歯ブラシによるOral Physiotherapyの15分間の歯肉への長時間歯肉擦過刺激実施後は口腔内だけでなく、口腔から遠隔にある不定愁訴や潰瘍・がんなどの症状発現部位において有益物質（Ach）は増加して、有害物質（Hg・ウイルス・細菌・Thromboxane B₂⁴⁾・Integrin $\alpha 5 \beta 1$ ⁴⁾）は減少し、その差引量が排尿後の尿中に確認された。それ故に歯周病治療のための正しいブラッシングとは長時間歯肉擦過刺激ブラッシングであり、その後は排尿することが望ましいことを報告した⁶⁾。

そのⅡ：2007年の第17回日本BDORT医学会において、藤巻 弘太郎は“ブラッシングの自律神

経系への影響”と題して発表した⁷⁾。それは3分間の歯面のみを磨く歯磨きブラッシングと15分間の歯肉や歯槽粘膜への擦過刺激を主としたブラッシング—Oral Physiotherapyの1つである長時間歯肉擦過刺激（以下マッサージ・ブラッシング）—を区別して実施した後に、自律神経系作動物質であるノルアドレナリン（NE）とアセチルコリン（Ach）が頭部・身体部でどのような影響を受けるのかを調べた。その結果、歯磨きブラッシングは全被験者の全測定部位でNEの2～5倍の増加と、Achの1/2～1/5の減少で交感神経系を優位にさせたこと。一方、マッサージ・ブラッシングはNEの1/2～1/10の減少と、Achの2～10倍の増加を確認し、副交感神経系を優位にできることを確認した。これらの結果から、口腔内だけでなく、心身の各部にわたる改善・健全化にはマッサージ・ブラッシングが適切であるとの結論として報告した⁷⁾。

【口腔管理のブラッシングに何を期待するのか】

ブラッシングで重要なことは何を目的にブラッシングするかである。

- ①歯を白くきれいにしようとするのが目的であれば、歯磨剤を付けて歯をこすり磨きをして、歯表面から茶渋ステインを削り取れば、白く見た目きれいになるが、虫歯予防や歯周病治療にはならず、交感神経系を優位にして、口腔内・心身各部の組織健全化には悪影響を及ぼす。
- ②プラークインデックスを指標として、プラークコントロールの成績を上げるのが目的なのであれば、歯表面に付着したプラークをこそぎとれば、プラークコントロールの成績を上げることはできるが、虫歯予防（？）にはなりえても、歯周病予防や治療にはならない。むしろ、歯磨きブラッシングでのプラークコントロールは交感神経系を優位にして、口腔内・心身各部の組織健全化には悪影響を及ぼす。
- ③口腔内諸組織を健全化させることを目的にブラッシングする場合。それには全身の健全化のことを考えてみれば、わかりやすい。それは生体内では隅々まで血液が行き渡ってはじめて細部までの組織は正常化する。それと全く同じで、口腔内では唾液が血液なのであるから、歯面のみならず歯肉粘膜などすべ

ての組織面に唾液が行き渡って初めて、口腔内は正常化する。この唾液の行き渡りは本来、正しい食事がなされることで、自浄作用があり達成されるのであるが、近代の人工軟性食のためにそれができなくなっている。

その誤りを是正するために、誤った食生活を代償する目的で、ブラッシングをして、新鮮な唾液を隅々まで行き渡らせる、と同時に全ての口腔組織に生理的な強さの擦過刺激を与え、マッサージ効果を出す必要がある。それが、日常的に励行されたとき、口腔諸組織は正常になる。これこそが、ブラッシングすることの本来の目的である。そのとき、極めて重要なことであるが歯磨剤は一切使用しないで唾液だけのブラッシングを行って初めて達成できるのである。

このときエナメル質を硬化促進させての虫歯予防には歯面を、歯周病予防治療には歯肉粘膜面を新鮮な唾液を擦り付けブラッシングすることが必要になる。もしこれができていれば、プラークぐらひはコントロールされてしまうのである。しかし、虫歯予防のためとして歯面だけに歯ブラシの毛先が当たるブラッシングは交感神経系を優位にさせるので、好ましくない。そこでまず、咬合面のゆすり磨きをしてから、歯頸部と歯肉歯槽粘膜を中心にフォonz法でのブラッシングと、歯間隣接部と歯間乳頭部歯肉への差し込み振動ブラッシングを確実に起こすことで、副交感神経系を優位にする歯肉擦過刺激ブラッシングが可能となる。そうすることで、心身の健全化ができるようになる。

- ④歯周病治療と治療後の維持安定が目的であればPhysiotherapyの一つである長時間歯肉擦過刺激ブラッシングを確実に施行することである。このとき、歯肉や歯槽粘膜の状況を正確に診査診断して、的確な擦過刺激が行われ続けば対症療法としてのブラッシングは可能である。しかし、最初に片山先生のつぶやきを記したが、ブラシだけでは歯周組織を長期に安定させ続けることはできない。私の体験からも歯周組織を10～15年を超えて、長期に安定させ続けることはブラシだけではできない。

【歯周病治療を成功させるために必要なことは】

病人の歯周病を治療しようとするブラッシングは、Physiotherapyの一つである歯肉や歯槽粘膜への擦過刺激を主とした長時間歯肉擦過刺激ブラッシングであり、それが的確に励行されると病人の心身の健全化に大きく関わる。それは、対症療法としての病変部の改善だけでなく、自律神経系を正常化させ、血流量も増加するので循環器系が正常化し、組織代謝も促進される。そして、胸腺の免疫機能の改善がなされ、免疫系が正常化することから感染症の改善回復が達成できる。その時に、感染症である歯周病は当然改善回復する。そのためにはPhysiotherapyの他の要因が同時に、並行して遂行される必要がある。

その要因がすべてなされると、口腔内諸組織の生理性が回復するだけでなく、脳内生理として、脳内物質の量・質的に変化して正常化されるので、こころの平静さと行動の積極性が獲得できる¹⁰⁾。

それは現代社会での混乱の原因であるストレスまでも個人的に管理制御できるようになり、体質改善を成功させることができる⁹⁾。

そのような自己管理としての日常生活改善が達成されることで、病人の歯周病を回復治療させていくだけでなく、回復した後の健康人になってからもクライアントとしてのその健康を日常的に維持増進させていけるようになる⁹⁾。

【同時に遂行すべきPhysiotherapyの要因】

感染症である歯周病治療は原因菌と宿主の抵抗力のバランスである。歯周病を解決をさせるためにはこれら両者に同時に働きかける必要がある。

細菌群にはブラッシングで菌数の減少と細菌叢を変化させ、正常化させることが必要である。

宿主の抵抗力は全身体力と免疫力の回復と増強で対応する。

そのための第一は血流量の改善であり、それには副交感神経系を亢進させることである。それを行うことで組織代謝の回復と循環免疫系の回復をはかれる。そのような自律神経系への働きを必要とする。それをするのがPhysiotherapyである。

この宿主の抵抗力の回復と増強にも循環系への刺激としてのブラッシング (Physiotherapy) はもちろん重要であるが、それ以上に、急性炎症のため、その部位で咀嚼することができず、噛むこ

とを避けていたのを、日常生活が出来る状況に戻すことが必要である。

そのためには、症状発現部位の組織崩壊を最小限にとどめながら、日常食生活を早期に回復させることが重要である。

それには咬合からの噛むというPhysiotherapy^{11,12,13)}を通して、循環免疫系の回復をはかることが優先されなければならない。

そのためにも、可能なかぎり早期に生理的咬合を回復させることである。時に咬合調整で、また時には、治療用義歯で咬合を生理的に安定させ、副交感神経系の亢進と免疫系の改善を確実にしながら、排尿・排便をキッチリ行い、日常生活を回復させるようにする¹³⁾。

そうすることで三度の食生活のみならず、安静時唾液嚥下時の咬合接触による心身生理を回復させる療法を日常的に実践できる。

その日常的な心身生理回復療法は早期に体調を回復させ、症状発現部位の変化を実感させ、病人自身に、自信を取り戻させることができるようになる。

そこに少しのゆとりが生まれれば、日常的な生活改善を可能にする話し合いをすることができて、食生活の内容にも、また、その食事の仕方にも注意を向けることができるようになる。

そうやって初めて、自分に目を向けての生活が可能になり、いわゆるPhysiotherapyとしての種々のさらなる活動もできるようになる。

【Physiotherapyが誤ったらどうなるか】

たとえば、噛むことは体に良いからよく噛んで食べなさいといわれているし、多数噛みはよいとして、患者に奨励したとしよう。何が起こるのか？その時の噛み合わせが生体に適合していなければ、噛むというそのことは交感神経系を優位にして病変部・症状発現部位を悪化させこそすれ、なおすことにはならない¹³⁾。それが歯肉の腫れ程度であれば、まだどうにか隠してしまえるかもしれないが、もしもガンを発症していたらどうだろう。うつであつたらどうだろう。もっと悪化するし、引きこもりが強くなるのは当然ではなかろうか。ブラッシングを例にしよう。

もしも、白くきれいな歯を求めて、歯ブラシをしたとしよう。何が起こるのか？歯面をブラシ

たら交感神経系を刺激して全身的にも、脳内にも悪影響を与える。

心身の治療を目的にブラッシングさせるのであれば、プラークコントロールを目標として歯ブラッシングするのは危なっかしい、危険すぎる行為である。

【何がPhysiotherapyか】

心身の生理は消化器の入口の口腔内だけでなく、消化器・泌尿器系の出口ももちろん重要であり、身もこころも全身・全体が関わることである。

それゆえ正しくPhysiotherapyが遂行されるためには医療者が注意深くかかわって、生理的な正しい噛み合わせを構築した上で日常生活で、正しいブラッシング指導のもと、それが励行され、排尿・排便がなされていることが必要となる。

その上で呼吸法も、歩行も、ジョギングも、体操も、排尿・排便を含み日常生活にあるすべての心身に關わる行動が、Physiotherapyとなる。

息をしても、無意識にツバを飲み込んでも、何をどう食べても、おしゃべりをして、笑っても、泣くことすらそれはPhysiotherapyとなる。

それを自分のためにしてあげればよい。

それを友人と楽しくゆかいに、いつでもやっていたらいい。それこそがPhysiotherapyとなる。

最も大切なことは私が納得した私であること。自分が、自分で、自分を、自分することである。それこそがPhysiotherapyである。

【歯周病を治療担当することのゴールは】

歯周病を治療担当することのゴールは初診時の歯槽骨の支持骨量を決して悪化させず、20年・30年と経過させ続けることにある。

加えて生理的といわれる加齢による骨変化すらも変化させないで、支持骨量を維持させ続けることにある。そのようになってこそ歯周病への医療の介入であったことが意味をもつ。

そのような日常生活を獲得するためにこそPhysiotherapyの一つとしてのブラッシングを行うのであるから、Physiotherapyを心身生理回復療法として、治療対象者の心身の生理条件を回復させ続ける療法と訳することに理解して頂けるのではないだろうか。

【結びとして】

口腔自己管理としてのブラッシングは誤った文化の代償として唾液をまぶしこみ、口腔諸組織を

正常化させることと、心身の生理性を回復させるためにこそ行う家庭療法なのであり、現在の欧米や日本で言われているようなプラークコントロールのために行う歯磨きではないことを明確に認識する必要がある。

【参考文献】

- 1) 片山恒夫：ある開業歯科医の想いー片山恒夫論文集一、豊歯会、大阪、1983
- 2) 片山恒夫写真集編集委員会編：開業歯科医の想いⅡー片山恒夫セミナー・スライド写真集一、豊歯会、大阪、1999
- 3) 大村恵昭：図説バイ・デジタルOーリングテストの実習、医道の日本社、神奈川、1994
- 4) 大村恵昭：顔を見れば病気がわかる、文芸社、東京、2012
- 5) Fujimaki G., : Effects of dental-care related behavior in daily life on systemic health
Part4. Psychosomatic change achieved by oral physiotherapy, Acupuncture & Electro-Therapeutic. Res., The Int. J., Vol. 39, pp 99-100, 2014
- 6) Fujimaki G., : The Effect of Oral Daily Life Activity on the Body - Part II The Effect of Oral Physiotherapy by Tooth Brush on the Body, Acupuncture & Electro-Therapeutic. Res., The Int. J., Vol. 27, pp281-282, 2002.
- 7) Fujimaki K., Fujimaki G., : Effects of Brushing on the Autonomic Nervous System, Acupuncture & Electro-Therapeutic. Res., The Int. J., Vol.32, pp289-290, 2007.
- 8) 有田秀穂：セロトニン欠乏脳ーキレる脳・鬱の脳をきたえ直すー. NHK出版、東京、2003.
- 9) Fujimaki G., Fujimaki K., : Dental care for stress relief, Acupuncture & Electro-Therapeutic. Res., The Int. J., Vol.31, pp317-319, 2006.
- 10) 藤巻五朗：治るため・治すための歯周治療、恒志会会報、Vol.6., pp31-36, 2011
- 11) Fujimaki G., Fujimaki K., : The Effect of the rhythmic activity of mastication on the brain substances, Acupuncture & Electro-Therapeutic. Res., The Int. J., Vol.30, pp313-314, 2005
- 12) Fujimaki G., : The Effect of Oral Daily Life Activity on the Body, Part I The Effect of Oral Activity such as Chewing on the Body. Acupuncture & Electro-Therapeutic. Res., The Int. J., Vol.27, pp285-286, 2002
- 13) 藤巻五朗, 藤巻弘太郎：咬合条件による自律神経系作動物質の変化、全身咬合、Vol13, No.2, pp1-9, 2007.

◆連絡先：パストラル歯科
〒110-0005 東京都台東区上野1-3-2
上野パストラルビル4F
FAX：+81-3-3836-3418
E-mail：goro@pastoral-shika.com